

初任者に見せたい授業

2023. 8. 18

小学2年生の国語の授業だった。教材は「ビーバーの大工事」である。めあてを先生と子どもと一緒に書いた。先生からは、「いっしょにできた？書いた人は姿勢よくしてください」と指示があった。めあては「ビーバーが木を切りたおすひみつを読みとろう」だった。このめあてだとまとめはどうなるのか。読み取るとは、子どもがどんなことをするのか。このあたりが、課題となる。

音読は、教科書を机において指で追う形での一斉読みを行った。その後、一人一文ずつ読んでいくリレー読みを取り入れた。ここで気になったのは、説明文なのに妙なイントネーションでの音読になってしまうことである。これは、低学年に多い。小学校高学年になっても続く場合もある。物語ならば、読み取った上での感情表現が入るのはわかる。だが、説明文である。正しく、適度な速さでの平板な読みでいいのではないか。きっと、子どもたちは、イントネーションをつけて、それっぽく読むのがいいと思っているのではなかろうか。

「ビーバーは、どのようにして木をかじるのですか」これは発問である。「書いてあるところにえんぴつで線を引いてください」「できた人は、お友だちと見せ合ってみて」その後、「どちらが正しいでしょうか」となった。比較、比べるが一番思考を促進させる。

「どうしてそんなすごいのはやさでかじれるの」という発問があった。子どもたちは、「ぐいぐいとかじっているのです」「のみのようです」「するどくて大きい歯」などの表現に目をつけた。「どうして」と聞かれれば、「～から」と考えるようになる。これも、思考が進む。授業者は、机間指導で、一人一人の状況を確認していた。これが、後の展開に生きてくる。

「今日のめあては何だったのでしょうか」と、めあてに戻っていた。ここで、「今日わかったことをビーバーに教えてあげて」「3分で書けるかな」と働きかけた。子どもたちからは、「ええ3分で」との声が上がったが、楽しそうである。最後には、「今日、1回も発表していない人はいたかな」と投げかけた。それだけ、全員の子どもが発言していたということである。

よくあることではあるが、授業者は、一つに導こうとしていた。それはわかるのだが、子どもたちのまちがいを生かすことができると、授業は、さらに一段階上に行く。子どもの発言の中には、「ぐいぐいとかじっている」に対して、「大工さんのつかうのみのよう」というものがあった。

この授業における授業者の指導技術は見事だった。その指導技術に支えられて、子どもたちが、生き生きと、伸び伸びとしていた。理想的である。この授業を参観したときには、まだ、私自身が自覚していなかったことがある。それは、小学校の授業、中でも低学年の国語の授業が大切だということである。リーディングスキルテストなどを通して、子どもたちの汎用的な基礎的読解力を考えたときに、低学年の重要性が浮き彫りになってくる。この授業のような国語の授業の積み重ねが求められている。ぜひ、初任者に見せたい授業であった。